

小泉元首相の引退は「プロの引き際」にあらず

美空ひばりや野茂英雄の執着心との大きな差異

- 2008年10月3日 金曜日
- [宮田 秀明](#)

[引退](#) [政治・経済](#) [リーダーシップ](#) [定年・生き方](#) [キャリア](#) [首相](#)

音楽は最大の不得意分野だ。嫌いなわけではない。この原稿も30年前のカリフォルニアの音楽を聞きながら書いている。でも歌手も曲名もほとんど何も知らない。

ある日のこと、秘書の女性に聞かれた。「先生、〇〇知ってます？」
どうやら歌手の名前らしいが、私は「知らない」と返事した。

彼女はもう一度口を開いた。「それでは、トキオ知ってます？」
私の答えは同じだった。そして彼女との会話は途絶えてしまった。

若い頃から、ニュースと天気予報ぐらいしかテレビを見ない生活スタイルが続いていることの影響が大きい。その私がある日ニュースを見ようとして、代わりに美空ひばりの回顧番組を見てしまった。私もさすがに美空ひばりは知っている。小学生の時、映画好きの母に連れられて彼女の映画を見に行ったこともある。

美空ひばりと野茂英雄の引き際の共通点

美空ひばりのプロとしての生き様には感動した。家族を失い、健康を害しながら、最後までプロフェッショナルの生き方を貫いた。プロのまま戦死したような人だ。超一流のプロは力のある限りプロであり続けようとするのだ。つらいから引退しようなどと思うことは最初から頭の中で削除してしまっているようだ。

今年引退した野球界の野茂英雄投手も同じような人だと思う。もちろん全く面識のない方だが、私がアメリカズカップの仕事に携わっていた時、ある米国人経営者が言った。「日本の野茂とアメリカズカップとサントリーウイスキーには感心したよ」。

20代の会社員の時、会社の仲間が作った草野球チームに所属していた。東京都の中央区野球連盟第4部(一番下のレベル)に属するチームで、私の役割は敗戦処理投手のことが多かった。球は速いがコントロールがダメだった。最悪の時は、2連続三振と3連続フォアボール

を繰り返すという具合だった。だから、野球のポジションの中で投手が一番孤独な仕事だということが少し分かる。

スポーツは体力の限界があるので、死ぬまで現役を続けるというわけにはいかない。しかし、執拗なまでプロの投手であり続けようとした野茂の生き方に感動を覚える人は多いと思う。

そして小泉純一郎元首相の引退である。

私は小泉首相の応援団の1人だと思っていた。少しだけだがお手伝いしたこともある。2004年の秋、内閣府が設けた「郵政民営化情報システム検討会」の委員の1人になったのだ。当時の郵政公社に情報システムの再構築の難しさが民営化の妨げにならないことを分かってもらい、暫定システムによって4分社化できることを説得する委員会だった。約2カ月半の活動が実を結び、翌年から民営化への作業が本格化した。

しかし、今度の小泉元首相の引退は、彼に対する評価を半減させたと思う。トップは常に孤独だし、周りの政界は曲者だらけだったり、人間的にも能力的にも問題の多い人物の渦巻く世界だろうから、嫌気が差すこともあるだろう。何より忙しすぎる。でもこんなふうには引退していいものだろうか。最後までプロであり続けようとした美空ひばりや野茂英雄の方がはるかに偉いのではないかと思う。

あなたも世襲をしてしまうのですか

子息を後継者にしようとするのも評価できない。古い自民党を壊すと言っていたことと矛盾する。古い自民党の最もまずい体質の1つが政治家の世襲である。2世3世のお坊ちゃま政治家が増えすぎて、政治家人材の劣化の進行が止まらないのに、小泉さんまで子息に世襲を行うのだろうか。自民党を“ぶっ壊した”功績は大きかったが、これに対する評価も自分で半減させてしまった。

小泉さんは無責任ではないかとさえ思う。もし改革路線を引き継ぐ後継者がたくさん育ってきている状況なら分からなくもないが、竹中さんも去り、旧態依然とした自民党に戻る流れが目立ち、新首相は無神経に小泉改革を否定し、古い政治スタイルを掘り起こそうとしている。

一方で、日本経済は下降速度を早めている。貿易収支(2008年8月)は赤字に転落し、国際競争力の低下傾向は変わらず、1人当たり国民所得も伸びていない。物価は上がり、国民の疲労感は増え続けている。日本はかなり厳しい危機の中にあるということは明白だと思う。

こんな状況で、プロの道から逃げ出すような引退は全く評価できないのではないか。闘士は最後まで闘ってこそ闘士だ。

こういう引退の仕方は日本固有のあきらめの文化と関係しているのかもしれない。英国のサッチャー首相は保守党党首を15年、首相を11年半務め、英国を立て直した。“鉄の女”となって、政治家というプロを全うしたのだ。

サッチャー首相が権力にしがみついたと思う人は少ないと思う。最も大きな責任を担う仕事を10年以上も続けて国を立て直し、国民に貢献しようとし続けたのだ。小泉元首相の国民に対する責任感はサッチャー首相よりかなり低いのかなというのが実感だ。大人と子供の関係と同じぐらいの差がある。

比較になることではないが、私も無様な引退を経験したことがある。2000年7月、アメリカズカップの挑戦活動を中止してしまったのだ。1999年10月から2000年3月にかけての第30回アメリカズカップのヨットレースでは予選で11チーム中2位になり、それなりの評価を頂いたが、目標は世界一になって、この伝統のレースを日本で開催することだった。だから、準決勝で敗退するという結果には不満足だった。

2000年の5月から2003年のレースに向けて活動を再開していたのだが、いろいろな事情で中止することになった。2000年7月19日、海の記念日の前日に岸記念体育館で行われる中止の記者会見に向かう途中、私の悔しさは頂点にあった。準決勝で敗退した時よりも、他のどんな時より悔しかった。

後に続くリーダーがない

私はヨット開発のプロだった。世界一のヨットを開発して日本中の期待に応えるのが私の仕事と思っていた。7年間激しい挑戦を続けてきた。最後まで、目的を達成するまで、やめることはもう許されないと考えていた。その気持ちをいきなり消さなくてはならなくなったのだ。プロにとってプロの道を遮断されるほどつらいことはない。

一国の首相を歌手や、スポーツ選手や私と同列に論じることは間違いだろう。しかし、小泉元首相の引退で日本がますます暗くなったと感じている人は多いと思う。この国に今必要なのは挑戦するリーダーなのに、リーダーのリーダーだった方がさっぱりと引退し、後に続くリーダーがないのだ。

ママゴトのような自民党総裁選挙、史上最軽量かもしれない新首相、そして小泉元首相の引退、日本転落のシナリオは確実に進行している。

良識のある人すべてが政治に絶望しているような状態はいつまで続くのだろう。